

## 「聞き手」の視点から見た同時通訳と逐次通訳

新崎 隆子

(東京外国語大学)

*This study aims to investigate the evaluation of simultaneous interpretation and consecutive interpretation by examining responses from listeners. Communication through interpretation involves interaction between speakers and listeners via interpreters. Although the evaluation of interpretation depends on listeners, the focus of research in Japan has been placed on the process of interpreting rather than on listener response. A survey of listener responses to interpretation from English to Japanese was conducted. Simultaneous and consecutive interpretations of a live, nationally broadcast speech in Japan were obtained, and both general viewers and professional interpreters were tasked with evaluating the interpretations. A comparison was then made of the appraisals effected by the two groups. The results show differences in assessment between the groups. It is suggested that a wide scope of discussions involving listeners, interpreters, and researchers is necessary to evaluate interpretation services.*

### 1. はじめに

本稿の目的は、同時通訳と逐次通訳に対する「聞き手」の評価を検討することである。通訳を介したコミュニケーションのプロセスには「話し手」「聞き手」「通訳者」の三者が関与し、それらの相互作用を通して意思疎通が可能になる。Wadensjö (1998) は通訳を介した対話を三者の相互作用と捉え、「コミュニケーションにおける3人の踊り」“Communicative pas de trois”と表現したが、コミュニケーションが「聞き手」の意味づけによって成立することを考えれば、それは講演や発表、放送された演説など一方向の発話の通訳にも当てはまると考えられる。通訳者の理解は原発言の内容や伝え方の影響を受け、「聞き手」の理解は通訳の質に依存する。通訳が効果的であったかどうかを評価するのは通訳の「聞き手」である。通訳者の発話を理解できない、または間違った情報を与えられたと感じるとき、その個所の通訳の利用価値はゼロまたはマイナスとなる。

---

SHINZAKI Ryuko, “Simultaneous and Consecutive Interpretations From the Perspective of Listeners,” *Interpreting and Translation Studies*, No.17, 2017. Pages 167-186. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

海外では通訳に対する利用者の評価に関する調査研究が多く行われてきたが、日本国内の研究の焦点は「原発言がどのように通訳されるか」に置かれ、「話し手」はある程度視野に入っているものの、「聞き手」の受け止め方についての研究は限られている。日本語母語話者が通訳をどのように評価しているのかを探るための一歩として、今回は英語から日本語への同時通訳と逐次通訳に対する「聞き手」の評価を調査した。日本国内の全国放送で生中継されたスピーチの同時通訳と逐次通訳を入手し、一般視聴者と通訳の専門家による評価を調査し比較した結果、両群の間の相違が観察された。このことから通訳の評価を論じるには、実務家や研究者などの通訳の専門家だけでなく、「聞き手」を含めた幅広い人たちの参加が必要であるという示唆が得られた。

## 2. 通訳の利用者による評価に関する研究

「聞き手」の視点に立った通訳の評価に関する研究は1990年前後から盛んになった。通訳と通訳者についての基準に関する初めての実証研究はHildgund Bühlerによって1986年に実施された(Pöchhacker, 2004; Kurz, 2001)。対象はAIIC(国際会議通訳者連盟)の会員で、これにより会議通訳者の期待は「聞き手」のニーズに対応しているという結論が導かれた(Pöchhacker, 2004, p.153)。

Kurz(2001)はBühlerの研究以降2001年までに12人の研究者が発表した利用者による通訳の評価に関する16件の研究を紹介した(pp.397-403)。すべて会議通訳の質を問うもので、16件中14件は同時通訳、2件が逐次通訳を用いた。そのうち、6件は実際に聞いた通訳の音声に対する反応(response)を尋ねたが、10件は会議の参加者や会議で通訳を利用する経験の多い人たちに通訳に対する期待を尋ねている。利用者が最も重要視しているのは原発言の内容でKurz(1993)は「意味の一貫性」(sense consistency)を挙げたが、他の研究者は“substance, fidelity” “content” “faithfulness to the original” “completeness”などが重要視されたと述べている。興味深いのは、4件の研究で利用者が声の質やデリバリーをあまり重要視していないと報告している点である。しかし、Collados Aisは統制された実験室での研究に基づき、抑揚のあるイントネーション(melodious intonation)は誤訳があっても高く評価されるのに対し、単調なイントネーション(monotonous intonation)の通訳は誤訳がなくても低く評価されることを報告した(Kurz, 2001, p.402)。Pöchhacker(2004)は、利用者がもっとも重視する基準である「忠実性」は利用者には認識されず、話しの方が質の評価に使われていると述べ、さらに、現場における通訳の質の評価については、状況、相互行為、テキスト間・内の談話分析、利用者の主観的評価などの変数が含まれ、利用者、通訳者、依頼者の視点を考慮する必要があるとしている(p.157)。

これらの研究の中で興味深いのは英語から日本語への同時通訳に対する10人の日本人利用者の反応を調べたNg(1992)の研究である。あらかじめ録音された学生による通訳について「聞きやすさ」「文法構造」「語彙の選択」「スピーチレベル」についてのコメントを分析した結果、利用者は「分かりやすさ」を最も重要視し、分かりにく

さはスピーカーではなく通訳者に責任があると感じていることが示された。これは利用者が原発言と通訳を比べられないことと関係がある。話し方についてはフィラーやポーズに否定的であった。また参加者の9割が会議通訳やビジネス通訳ではスピーチレベル（丁寧さ・ポライトネストラテジー）の適切な使用が必要だと述べている（pp.36-38）。

最近に行われた研究としては Amini, et al. (2013) が、利用者の評価研究の変数として利用者の年齢、性別、会議出席経験、教育レベル、母語を挙げている。また、Amini, et al. (2015) は、利用者の期待は忠実性、デリバリー、用語、完結性、文法、同時性、スタイル、イントネーション、声の質、ネイティブのアクセントの順に高いと述べた。

以上の先行研究を概観した結果、期待（expectation）と実際の通訳に対する評価（assessment）のどちらの調査が利用者の評価として有用か、質問紙法とインタビュー法のどちらが適しているか、またどのような変数を含めるのかなどについての基準が統一されておらず、結果の比較可能性は疑わしい状況にあると言える。

### 3. 放送における生同時通訳に対する視聴者の評価

稲生（2003）によれば、1984年に日本国内で初めて英語のニュースの二か国語放送を始めたのはCNNだった。1989年にNHKが衛星放送の本放送を始めると、放送通訳に関する研究が盛んになった。視聴者の評価に関する調査としては木佐（1993）や柴田他（1999）があるが、前者は時差通訳を扱ったもの、後者は在日外国人を対象にした英語放送の評価である。稲生（2003）は、放送通訳では視聴者が聞き取りやすい声の質と分かりやすい訳出が重要視され、生同時通訳においては要点をまとめる力が求められると述べたが、視聴者の受け止め方には触れていない。水野（2012）も「放送通訳は会議通訳と違いマスコミュニケーションであり、視聴者の数は数千万人にも達する」として、「語彙の選択、訳文、デリバリーの面で分かりやすさ聞きやすさが求められる」と述べるに留まっている（p.161）。英語から日本語への生同時通訳に対する視聴者評価については、日本国内の実証研究は皆無に近いと言えよう。

外国では Pöchhacker（2011）が、オバマ大統領の就任演説の生同時通訳に関する視聴者の評価を論じている（pp.29-30）。ドイツ人を対象にした調査では、「論理的ー貫性」「完結性」「流暢さ」「文法の正確さ」「聞きやすい声」の順に重要視され、聞きにくい要因の順番は「頻繁な訂正や言いなおし」「言い淀み（フィラー）」「単調なイントネーション」だった。Gile（2011）も同じ演説を用いて仏語、独語、日本語への同時通訳を Effort Model を基に、誤訳、欠落、不適切な訳出を分析したが、視聴者の評価は調べていない。また、Andres & Fünfer（2011）は通訳者とテレビ局の番組編成担当者を対象にして質的評価の調査を行ったが視聴者の期待や反応は扱わなかった。以上のことから、会議通訳と比べて放送通訳についての視聴者評価の研究はほとんど始まっていないと言える。

#### 4. 同時通訳と逐次通訳の比較評価

Gile (2001) は同じスピーチの同時通訳と逐次通訳を正確さ (accuracy) の視点から比較する調査を行った。逐次通訳では言語的に完結したメッセージを聞いた後で通訳を始めることができるのに対し、同時通訳では原発言のスピードに遅れることが許されないため完全な意味を理解しない短いセグメントごとに通訳をしなければならず、一般的に逐次通訳の方が同時通訳より正確であると言われている。しかし、Gile (2001) は、原発言のスピードが速すぎるとき、逐次通訳は不可能でも同時通訳ならば可能という場合もあるという通訳者の話を聞いて通説に疑問を抱いた。

調査には5年以上の実務経験のある通訳者20人が参加し、1分40秒の英語のスピーチを10人が同時通訳、10人が逐次通訳した。これをGile氏が評価した結果と、実験に参加しなかった二人の通訳実務専門家が別々に行った評価と突き合わせ、一致率が高いことを確認した。その結果、同時通訳の方が逐次通訳よりも正確だということが示された。

Gile (2001) の調査では通訳の書き起こし原稿を通訳の専門家が読み、問題を引き起こしうる9つの原因別に量的な分析を行って正確さを判定した。しかし、この方法を専門知識のない利用者による評価の調査に応用することは難しい。「聞き手」は、内容の分かりやすさや音声的な聞きやすさを総合した主観的な評価を行っていると思われるからである。

そこで今回は、Gile (2001) が示した同時通訳と逐次通訳の作業モデルと、Ng (1992) の用いた質的分析の方法を参考に、一般的な「聞き手」の評価を探るための調査をデザインした。今回は実験的な環境で録音された通訳ではなく、実際に放送で生中継されたスピーチの同時通訳と逐次通訳の録音を入手し、8人の一般視聴者と5人の通訳の専門家の評価を調べた。

#### 5. 同時通訳と逐次通訳に対する評価の調査

##### 5.1 調査の目的と方法

調査の目的は、一般の視聴者が同時通訳と逐次通訳をどのように評価しているかを調べ、通訳の専門家の評価と比較することである。一般視聴者は、放送番組を見る動機、目的、内容への関心の強さなどが多様であるため、定義が難しい。そこで、今回は使用した番組の内容に強い関心を持っていると思われる人たちを「真剣な聞き手」(serious listener) と位置付け、その通訳への評価を調査した。参加者は海外勤務や国際業務の経験があり国際情勢への関心がある60代の男女8人(以下、A、B、C、D、E、F、G、Hと記す)である。調査は2017年4月9日、8人が一堂に会して筆者が操作する録画を視聴し、評価表に記入するという形で行った。なお調査の手続きに関する以外の発言は禁じ、独立した評価が得られるように配慮した。専門家調査には長年に亘って通訳訓練を受け実務経験のある5人(以下、I、II、III、IV、Vと記す)が参加した。こちらは音源を指示し、Eメールで送付した評価手順書と評価表を用いて自宅で評価を

してもらった<sup>2</sup>。両群ともこの記者会見のことは知っていたが、ライブで放送を聞いた人はいなかった。

実験に使用した原発言は、2016年5月25日の夜に日本で行われた安倍晋三総理大臣と米国のオバマ大統領の日米首脳共同記者会見におけるオバマ大統領の発言である。この模様はNHK総合放送で午後10時40分ごろから生中継された。NHKは別々のスタジオに日本語から英語への同時通訳者2名と英語から日本語への同時通訳者2名を用意し、首脳の発言を同時通訳で放送する体制を取った。

最初に安倍総理大臣が発言を始めた。NHKはバイリンガルチャンネルで英語への同時通訳を放送したが、最初の一区切りが終わると現地にいた外務省の通訳官が逐次通訳を始めたため、英語への同時通訳は最初の2～3回以降は中止された。次にオバマ大統領が発言した。NHKは日本語への同時通訳を始めたが、すぐに現地の米国大使館の通訳者が通訳を始めた。この通訳者は話の区切りを待たず、大統領の発言に日本語をかぶせるような通訳をしようとして司会者から制止され、「逐語訳でやってください」と言われている。NHKの同時通訳者は逐次通訳者の声が聞こえた時点で通訳を中断し、その個所の逐次通訳が終わるのを待って次の原発言から同時通訳を再開した。英語の放送と異なり、日本語放送の同時通訳は中断されず、総合放送の視聴者はオバマ大統領の英語にかぶさって流れる同時通訳と、その後の逐次通訳を聞くことになったのである。この時のNHKの判断については、インターネットに多くの疑問の声が寄せられた<sup>3</sup>。

記者会見場で逐次通訳を行ったのは在京米国大使館の通訳者(Z)であった。訪日する米国の要人の通訳を主に担当している通訳者であり、その通訳技術は大使館で一流と評価されていると見なされる。NHKで同時通訳を担当した二人の通訳者(X、Y)は23～25年間の放送通訳経験を有しNHKから一級レベルと評価されており、重要な会見の生同時通訳を1年に数回引き受けている。すなわち同時通訳も逐次通訳も一流のレベルと言って良いだろう。

評価は2段階で行った。評価1は通訳音声聞いて行われた。逐次通訳の区切りに合わせ、オバマ大統領の冒頭発言11セクションと最初の記者の質問に対する答え7セクションについて、内容とデリバリーを5段階で評価してもらった。内容は「内容が理解できるか」の評価として論理的か、文が完結しているか、文法的に正確か、用語は適切かなど、「デリバリー」については「聞きやすさ」の評価として声の大きさや高さ、発話の明瞭さ、スピード、間の取り方、フィラー、繰り返しなどに注目するように促した。評価2では、通訳文の書き起こし、オバマ大統領の発言の書き起こし原稿、さらに筆者が行った忠実な日本語訳を対照させた文書を配布し、通訳が原文に忠実に行われているかどうかをセクションごとに評価してもらった。視聴者の評価は通常、通訳音声に対して行われるが、先行研究により、利用者が原発言に対する「忠実性」を重要視していることが明らかのため、「忠実性」に対する評価についても専門家と比較する必要があると考えた。また調査の後、視聴者には評価の理由について個別に追加

の質問を行った。

## 5.2 分析方法

評価は視聴者も通訳専門家も同じ基準に従って行った。評価者ごとに、5段階評価の総和を計算したものを百分比に換算して点数化した。例えば冒頭発言の「内容」であれば、「とてもよく理解できる」を5点として計算し、11セクションのすべてに5を付けたとすると満点は55点となるので、総和が38点の場合は百分比で69となる。冒頭発言と質疑応答を別々に評価してもらった理由は、ひとつのセクションの長さが大きく異なるからである。冒頭での原発言は1セクション当り最長でおおよそ20秒だが、質疑応答では4分近くになっているため、逐次通訳者の記憶の負担が重くなると考えた。

## 5.3 視聴者の調査結果

音声だけを聞いて評価する評価1の「内容」「デリバリー」のすべてにおいて逐次通訳の評価が同時通訳を上回った。放送を聞く視聴者は通訳の音声のみを聞くため、評価1は実際の通訳に対する評価に近いと考えられる。

表1. 視聴者の評価：内容・デリバリー・忠実性

	内容		デリバリー		忠実性	
	冒頭	質疑	冒頭	質疑	冒頭	質疑
同時通訳	68	53	67	59	60	47
逐次通訳	73	76	73	75	75	59

「内容」についての差は冒頭発言が5、質疑応答が23で、質疑応答の方が差は大きい。「デリバリー」の差は冒頭発言が6で質疑応答は16だった。「忠実性」についての評価2では通訳の書き起こし文と原発言の英文、その忠実な和訳文を比較し、時間をかけて照らし合わせた。ここでも、逐次通訳が同時通訳を上回っている。視聴者は音声で聞いたときに逐次通訳は同時通訳よりも内容が理解しやすく、聞いていて心地よいと感じ、書き起こしを見ても原発言を忠実に訳していると感じたことが示されている。

しかし、参加者ごとに見ていくと評価には個人差があることが分かる。図1と2は評価1における「内容」と「デリバリー」を合わせた分かりやすさの総合評価を冒頭発言と質疑応答に分けて示している。参加者Gは冒頭発言で同時通訳の方を高く評価し、参加者Cは冒頭発言では同等、質疑応答では同時通訳の方を高く評価している。他の5人は冒頭発言も質疑応答も逐次通訳の方を評価しており、質疑応答ではその差が広がっている。

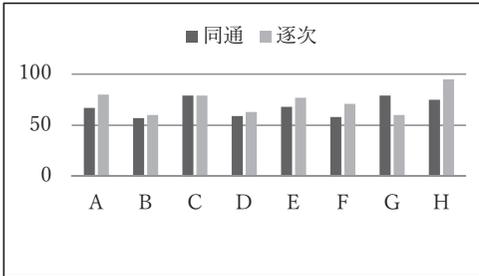


図 1. 冒頭発言の評価 1.

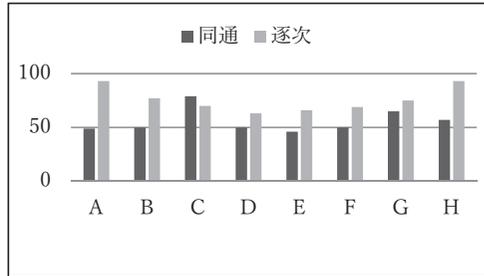


図 2. 質疑応答の評価 1.

評価 2 の「忠実性」の評価は同時通訳も逐次通訳も質疑応答の方が低くなっているが、興味深いのは逐次通訳の音声のみによる分かりやすさの総合評価（図 3）と、原稿と照らし合わせた「忠実性」の評価（図 4）の違いである。

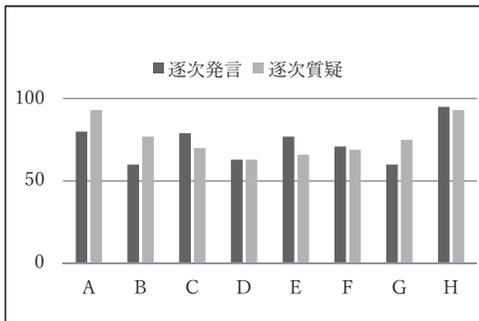


図 3. 音声で聞いた逐次通訳・評価 1

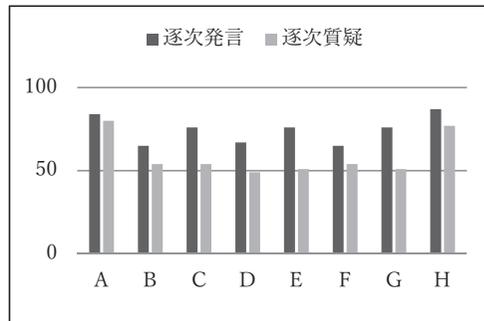


図 4. 逐次通訳の忠実性・評価 2

逐次通訳について、冒頭の発言と質疑応答を比べると、質疑応答では音声で聞いた評価 1 よりも原稿と照らし合わせた評価 2 が低く、参加者 A、B、G の評価が逆転している。これに対し同時通訳ではそのような逆転は見られない。これは、書き起こした原稿を比べる評価が音声を聞いて行われる評価とずれる可能性を示し、逐次通訳では音声の方が良い印象を与える傾向があることを示している。

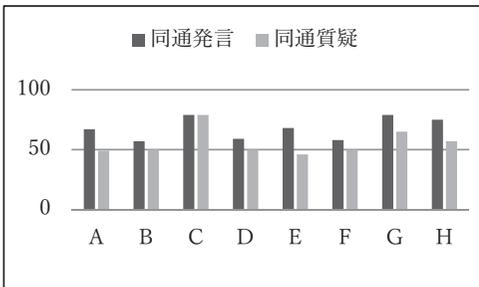


図 5. 音声で聞いた同時通訳・評価 1

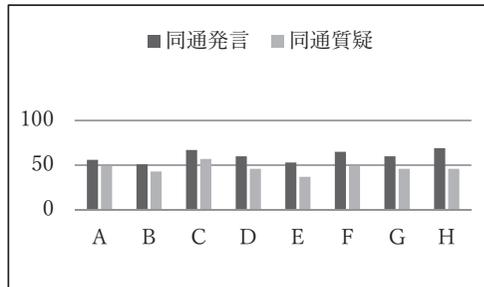


図 6. 同時通訳の忠実性・評価 2

評価1で同時通訳が唯一高く評価されたのは冒頭発言の4で「内容」も「デリバリー」も8人中3人が高く評価し、4人が同等、低く評価したのは1人だった。

4. 原発言：As Prime Minister Abe indicated, we did discuss the tragedy that took place in Okinawa, and I extended my sincerest condolences and deepest regrets.

同通 (X)：安部総理がおっしゃったように、私たちは話し合いました。まず沖縄で起きた悲惨な事件のことで、そして私は心からの哀悼の意を申し上げました。

逐次 (Z)：安部首相が言及なさいましたように、私どもは沖縄で起こりました悲劇について話をさせて頂きました。そして、私は、あー、これにつきまして心の底からのお悔やみの気持ちと、深い哀悼の意を表明させて頂きました。

冒頭発言11も比較的同時通訳の評価が高く、「内容」は3人が高く評価し、4人が同等、「デリバリー」は1人が高く評価し、5人が同等、2人が低く評価した。

11. 原発言：And our visit to Hiroshima will honor all those who were lost in World War II and reaffirm our shared vision of a world without nuclear weapons, as well as highlight the extraordinary alliance that we have been able to forge over these many decades.

同通 (Y)：そして広島訪問、それは、すべて戦争で亡くなった人たちを追悼するものであり、えー、そして核のない世界という、共有されたビジョンというものを確認し、そして私たちが培ってきました素晴らしい同盟について再確認する機会となります。

逐次 (Z)：そしてまた私どもが広島を訪問させていただくと、えー、いうことによりまして、第二次世界大戦で命を失った方々に敬意を表し、えー、そして核兵器なき世界の実現というビジョンを再確認し、日本の友人の皆さまとの卓越した同盟関係を強調、強化し、えー、そしてこれを更に強調することができるということを申し上げました。

分かりやすさの総合評価については、冒頭発言に比べて質疑応答の方が逐次通訳と同時通訳の評価の差が大きい。これは通訳を聞く時間の長さも関係しているのではないかと思われる。提供された情報量が同じでも、それを咀嚼し理解するには時間がかかるため、話すスピードがゆっくりで情報を繰り返し聴ける方がより分かりやすいのは当然である。この点で、原発言と同じ時間しか使うことを許されない同時通訳に比べて、ある程度自由に時間を使える逐次通訳は有利である。そこで、それぞれのセッションの原発言と逐次通訳の時間を比較した。

表 2. 冒頭発言における同時通訳と逐次通訳の所要時間（秒）

セクション	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
同時	15	8	8	11	8	9	9	9	8	11	19	115
逐次	20	11	9	17	17	19	16	24	16	19	28	196

表 3. 質疑応答における同時通訳と逐次通訳の所要時間（秒）

セクション	1	2	3	4	5	6	7	合計
同時	127	20	8	25	224	49	62	515
逐次	235	28	13	23	280	57	93	729

原発言とほぼ同じ秒数で訳し終える同時通訳に比べて、逐次通訳は冒頭発言では平均で 1.7 倍、質疑応答で 1.4 倍の時間を要している。オバマ大統領は質疑応答のセクション 5 の逐次通訳の後で「通訳になると長くなる」と発言した。ここは原発言が最も長いセクションだが、逐次通訳対同時通訳の所要時間の倍率は平均よりも少ない 1.25 倍だった。これは逐次通訳の場面でしばしば見られる原発言者の反応である。特に目標言語を理解できない原発言者は、逐次通訳の間待たされる時間を長く感じるだろう。ただし、目標言語をある程度理解できる場合は、それほど長さを感じないかもしれない。訳出された情報の量が同じであればゆっくりと時間をかけて聞く方が良く理解できると感じるのは当然である。この点からも逐次通訳は同時通訳よりも「聞き手」にとって分かりやすい通訳形式だと言える。

#### 5.4 通訳専門家の調査結果

評価 1 では、「内容」は冒頭発言、質疑応答とも逐次通訳の評価が同時通訳を上回ったが、「デリバリー」はいずれにおいても同時通訳の評価の方が高かった。

表 4. 専門家の評価：内容・デリバリー・忠実性

	内容		デリバリー		忠実性	
	冒頭	質疑	冒頭	質疑	冒頭	質疑
同時通訳	73	68	80	78	74	64
逐次通訳	81	77	76	75	86	64

「内容」に関しては、「冒頭発言」で逐次通訳が同時通訳を 8 ポイント上回り、「質疑応答」でも同様に 9 ポイント上回った。逆に「デリバリー」では「冒頭発言」で同時通訳が逐次通訳を 4 ポイント、「質疑応答」では 3 ポイントそれぞれ上回った。「忠実性」の評価では冒頭発言で逐次通訳が同時通訳より 12 上回っているが、質疑応答では同等

であった。総合すると、専門家は音声で聞いた場合の「内容」は逐次通訳、「デリバリー」は同時通訳の方を高く評価し、原稿と照らし合わせた「忠実性」の評価では同等もしくは逐次通訳の方を高く評価している。また、点数の格差は視聴者の評価よりも少ない。

以上は、評価の点数を積み上げた結果だが、これだけでは同時通訳と逐次通訳のどちらが支持されたかは分からない。そこで、通訳が行われた18セグメントごとに同時通訳と逐次通訳のどちらの方を支持したかを数えることにした。音声評価は「内容」と「デリバリー」に分けて合計で36回、「忠実性」の評価は18回について、「同時通訳の方が高い」「どちらも同等」「逐次通訳の方が高い」と判断された回数を調べた。

### 5.5 同時通訳と逐次通訳に対する視聴者と専門家の個人別選択の比較

通訳の音声を聞いて行った「分かりやすさの総合評価」である評価1を視聴者と専門家で比較すると、視聴者が同時通訳よりも逐次通訳の方を高く評価する傾向が明らかに認められた(図7)。36回中20回同時通訳を選んだ参加者Gと逐次通訳をほとんど選ばなかったCを除いた6人は逐次の方が良いと感じており、A、H、E、Fは同時通訳に対してとても厳しい評価をした。これに対し、専門家はいずれもある程度同時通訳を評価していることが分かる(図9)。専門家Iは同時通訳、専門家IIは逐次通訳の方を強く支持しているが、視聴者に見られるほどの逐次通訳への偏りは見られない。

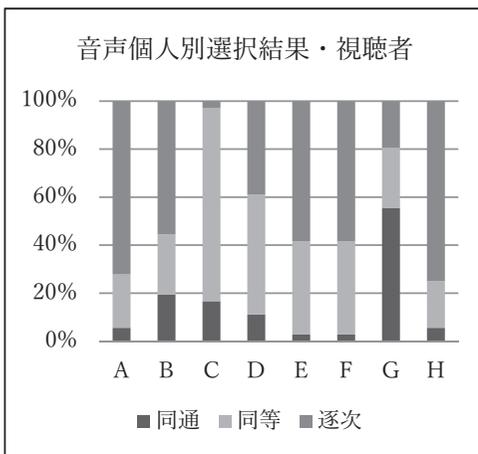


図7. 評価1における視聴者の選択

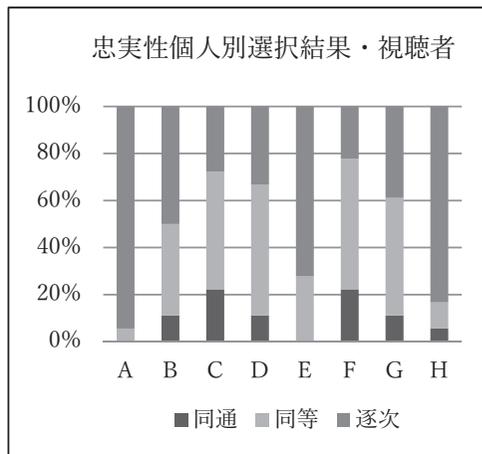


図8. 評価2における視聴者の選択

次に、視聴者の「忠実性」評価を見ると(図8)、Fを除いて視聴者の逐次通訳の選択が増えていることが分かる。また音声評価で同時通訳を強く支持していた参加者Gの選択は、原稿を照らし合わせて調べた結果、同時通訳の比率が下がり同等や逐次通訳が増えている。また、音声評価で逐次通訳をほとんど選ばなかったCも逐次通訳の選択を増やしている。全般的に見るとC、F、G以外の5人は音声で聞いたときと原稿

で見直したときの印象があまり変わらなかったようである。

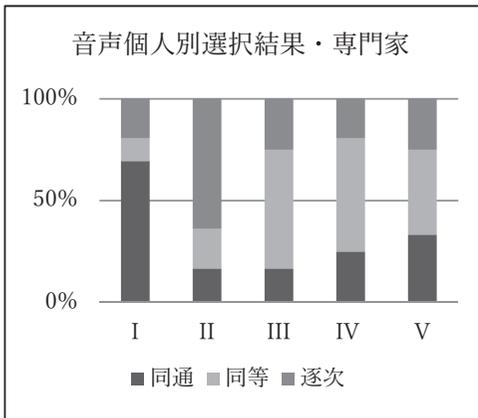


図9. 評価1における専門家の選択

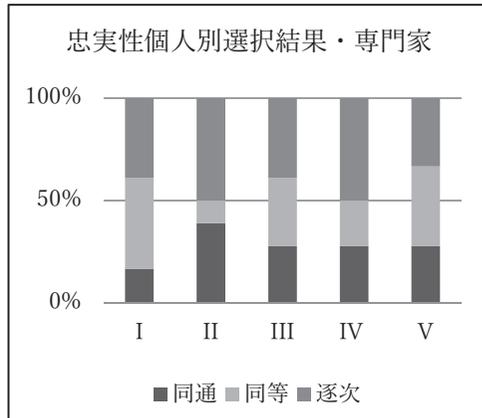


図10. 評価2における専門家の選択

一方、評価2における専門家の選択を見ると（図10）、音声評価で強く同時通訳を支持していた専門家Iが同時通訳への評価を大きく下げ、反対に音声評価で同時通訳に厳しい評価をしていた専門家IIがかなり評価を上げている。

以上の観察は次のように解釈することができる。

- 視聴者は同時通訳よりも逐次通訳の方が分かりやすいと感じる傾向がある。
- 視聴者は同時通訳よりも逐次通訳の方が原文に忠実だと判断する傾向がある。
- 専門家は音声評価で「デリバリー」を重要視する。
- 専門家は、音声評価と「忠実性」評価の両方において視聴者よりも評価が高い。

通訳の専門家による評価は視聴者の評価と異なり、書き起こした通訳文を分析する評価は、「デリバリー」の判断が入る実際の音声通訳の評価とずれる可能性が高いことが示されている。しかし、これだけでは、調査参加者がどのような点を重要視していたかは分からない。そこで、調査票に書き込まれたコメントと、調査後に行った質問に対する回答を検討した。

## 5.6 評価コメント

視聴者と専門家の評価1と評価2に書き込まれたコメントを「情報」「訳出」「デリバリー」に分類し比較した。

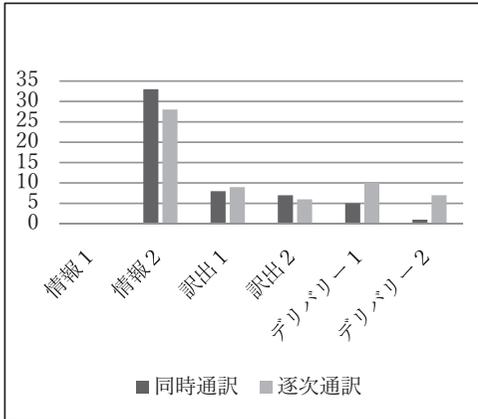


図 11. 視聴者のコメント数

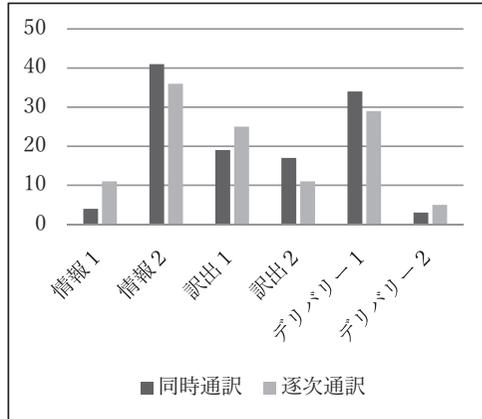


図 12. 専門家のコメント数

一人当たりのコメント数は視聴者が14、専門家が47で専門家の方がはるかに多い。まず視聴者のコメントを検討する。評価1では、視聴者は情報についてまったくコメントをしていない。これは通訳された情報の正確さを吟味しなかったことを示している。評価2で原稿を照らし合わせて初めて「誤訳」や「欠落」を指摘している。訳出については評価1において、同時通訳については「日本語の構文が不自然」「不適切な訳語」、逐次通訳については「不適切な訳語」を指摘した。これは、通訳された情報が原文に忠実かどうかは分からないが、日本語としておかしいと感じたところがあったことを示している。「デリバリー」に関しては、同時通訳には「スピードが速い」、逐次通訳には「発音が聞きにくい」「言い回しが耳につく」というコメントがなされ、評価2では逐次通訳について「冗長」という指摘が加わった。これは、音声で聞いたときよりも、書き起こしを読んだときの方が、通訳文の冗長さが目立ったということであろう。

専門家は評価1においても情報に関してコメントし、同時通訳は「意味不明」、逐次通訳は「誤訳」「原文にない追加」を指摘した。評価2では、同時通訳は「欠落」、逐次通訳は「原文にない追加」が特に多く指摘されたが、訳出については評価1と同程度の指摘に留まっている。専門家の評価の特徴は評価1の「デリバリー」についてのコメントが多いことである。同時通訳は34、逐次通訳は29だった。

表 5. 視聴者と専門家の主なコメント内容

	視聴者	専門家
同時通訳 評価 1	訳語が不適切 日本語の構文が不自然 スピードが速い	意味不明 日本語の構文が不自然 聞きやすい スピードが速い 語尾がつぶれる
同時通訳 評価 2	意味不明、欠落、不適切な訳語	誤訳、欠落 日本語の構文が不自然
逐次通訳 評価 1	訳語が不適切 言い回しが耳につく 発音が聞きにくい	誤訳 不適切な訳語 不自然な日本語 言い回しが耳につく 繰り返が多い 冗長
逐次通訳 評価 2	誤訳、原文にない追加、冗長	誤訳、欠落、原文にない追加 誇張、冗長

同時通訳について両群に共通するコメントは、「スピードが速い」「日本語の構文が不自然」「意味不明」で、これは原発言を聞きながら同時に訳出していく同時通訳の形式に特有の反応と言える。逐次通訳の方は「原文にない追加」「繰り返し」「冗長」「言い回しが耳につく」が共通のコメントとして出されているが、逐次通訳の形式というよりも通訳者の個人的な通訳スタイルに関係すると思われる。

逐次通訳が冗長であるという指摘は、冒頭発言よりも質疑応答の通訳に多く見られた。それはセクションの長さの違いと関係していると思われる。冒頭発言は平均 10 秒だが、質疑応答では 73 秒で、もっとも長いセクションは 224 秒（3 分 44 秒）だった。質疑の中で視聴者と専門家の評価の差が大きかったのはセクション 6 である。

質疑応答 6. 原発言: My answer sounds so much longer in translation. So, just very briefly, on China. Our growing partnership with Vietnam is happening entirely independent from China, and is based on mutual interests to expand trade, to expand cooperation across a whole range of areas, and is 30 years in the making now. So, the fact that China would perceive that as some sort of provocation to them I think says more about Chinese attitudes than it says anything about our attitudes.

## 同時通訳：

あ、非常に、通訳が長くなってしまいうんですけども、中国に関してですが、われわれのベトナムとのパートナーシップが非常に大きくなっています。それはその中国とはまったく独立して行われています。そして、えー、貿易を拡大していこうという相互の関心、えー、また、さまざまな分野で協力を拡大していこうということ、ま、これはやはり30年かけて行われてきたことです。ですから、まあ、中国がそれを、まあ何らかの、えー、その挑発と見るというのは、示すものではありません。(49秒)

## 逐次通訳：

えー、そして手短にいきたいと思えますけれども、えー、中国とですね、今回ベトナムとわれわれが、あ、親交を結んでいくということについては、中国とはまったく関係のない独立した事象であるということをお願いしたいと、えー、思います。これは、米国とベトナムとの相互の、えー、関心を拡大していこうと、そして貿易を振興させていこうという両国の、えー、関心によって行われているものであり、あらゆる、あー、分野において、協力を高めていこうと、えー、いう望みの表れであり、えー、そしてその努力を30年間、えー、まだ続けている、その延長であるということをお願いしたいと思えます。こういった私どもの行動を中国は挑発と見ているようでありますが、これは中国が勝手にそのような態度を標榜しているということでありまして、私どもはそのような考えはまったく持っておりません。(57秒)

表6. 質疑応答6についての評価

	視聴者			専門家		
	内容	デリバリー	忠実性	内容	デリバリー	忠実性
同時通訳	53	63	63	92	92	96
逐次通訳	83	80	68	72	68	72

視聴者については「内容」については同等としたCを除く7人が逐次通訳の方を評価した。「デリバリー」はGが同時通訳を評価、C、D、Fが同等、A、B、E、Hが逐次を評価した。「忠実性」についてはCが同時通訳、D、E、F、Gが同等、他のA、B、Hが逐次通訳の方を高く評価した。専門家については「内容」と「デリバリー」に関してIIIを除く4人、「忠実性」についてはIVを除く4人が同時通訳を支持した。

このセクションについて専門家は以下のようなコメントを書き込んでいる。

- a) 「勝手に」「標榜する」は訳しすぎだと感じる。この日本語訳からリレーで中国語訳をした場合に中国人が誤解して受け止めてもおかしくなく、危険。
- b) 「申し上げたいと思えます」「関心を拡大していこうと」など原文にない訳語の付

け足し、中国が「勝手に」「標榜」「まったく」など、原文に比べて訳出が大きき。

- c) 同時通訳であることを考えれば、ほぼ忠実な通訳である。
- d) 同時通訳は（意味が分かるまで）少し待ってから訳しているので、かなりまとまって意味の通じるものになっている。

専門家のコメントからは、通訳に関する自らの知識や経験を思い起こしていることや、同時通訳の技術的な難しさを考慮したことがうかがえる。

## 5.7 評価に関する追加質問に対する視聴者の回答

視聴者が調査表に書き込んだコメントが少なかったため調査後に E メールにより以下の質問を送り回答してもらった。

- a) 逐次通訳、または同時通訳を高く評価した理由。
- b) 通訳を聞く立場の場合、同時通訳と逐次通訳のどちらが良いか。その理由は何か。
- c) 通訳される「話し手」の立場の場合、同時通訳と逐次通訳のどちらが良いか。また、その理由は何か。
- d) 同時通訳と逐次通訳を比べたその他の感想。

### 5.7.1 逐次通訳を高く評価した理由

共通して見られるのは日本語としての聞きやすさだった。「日本語としてこなれている」(B)、「自然な日本語」(F)、「日本語として分かりやすい」(A、C)。逆に同時通訳については「語順が倒置し、文脈がつかまらない」(A)、「日本語としておかしい」(E)という指摘があった。

### 5.7.2 同時通訳を高く評価した理由

「内容が平易な冒頭発言は同時通訳の方が全体的に分かりやすかった」という指摘もあるが、全体的に同時通訳を積極的に支持するというよりは逐次通訳への批判が多かった。共通して見られるのは通訳の冗長さで、「冗長」(D)、「フィラーが多い」(G)、「同じことの繰り返し」「まわりくどい」(F)、「文が長すぎる」(G)などの指摘があった。この点については「話し手」が長くしゃべると記憶やメモで十分に復元できないため」(B、D)と理解されている。また「逐次通訳は同時通訳に比べて時間的制約などのリスクが低いので、同時通訳より良くできて当然である」(C)という意見もあった。さらに、「原稿を照らし合わせた後で、忠実性に疑問を抱いた」(D)、「聞いたときは同時通訳の言葉が足りないと思ったが、原稿を読むと逐次通訳よりもずっと頭に入ってきて分かりやすい」(F)など、音声で聞いたときと原稿を読んだときの評価の違いを述べたコメントもあった。

## 5.7.3 「聞き手」としての選択

「同時通訳は時間的な効率性が高く」(C、D)、「時間が限られているときや質疑応答のように速い反応を求められるとき」(B)や、「ニュースや挨拶など内容が分かりやすいもの」(C)に望ましいというコメントがあり、「完璧に近い同時通訳ができれば、それが通訳の理想」(H)という意見もあった。一方で逐次通訳は「起点言語も聞ける」(A、B、G)ため、「じっくりと聞きたい」(B)、「まとまった内容」(C、F)の場合に望ましいという意見があった。また「同時通訳では通訳者に全面的に依存することになるので、逐次の方が満足できる」(A)、「時間的に余裕のある逐次の方が正確」(E)というコメントもあった。

## 5.7.4 「話し手」としての選択

効率では同時通訳が選択されたが(B、C)、「答える時間を稼ぐことができる」(B)、「内容を確認することができる」(G)、「同時通訳ではきちんと訳してもらえないか不安」(A)、「より正確である」(E)、「通訳者と十分な打ち合わせができていないときに安全」(C)、「自分の言いたいことを深く理解した上で「聞き手」に伝える工夫をしてもらえる」(C)などの理由で逐次通訳が選択されている。また、逐次通訳者の記憶の負担を考え、打ち合わせや一回に長く話しすぎない配慮が必要とのコメントがあった(C、E)。

## 5.7.5 同時通訳と逐次通訳を比較した感想

同時通訳と逐次通訳の特徴についての視聴者の回答を表7に示す。

表7. 利用者の視点から見た同時通訳と逐次通訳の長所と短所

	長所	短所
同時通訳	原発言を瞬時に捉え、雰囲気までストレートに伝える臨場感のある通訳ができる。 「話し手」はリズムや勢いを失うことなく、生き生きしたスピーチができる。 通訳のための時間が要らず、効率的である。	時間的制約が厳しく、一か所でつまずくと、後れを取り戻すことが容易ではない。文章が完結しない、肯定と否定が逆転するようなリスクが付きまとう。 スピードが速く聞きにくい。
逐次通訳	時間的な余裕がある。通訳者は話のポイントを的確につかみ、分かりやすく伝えることができる。「話し手」にとっても、通訳の間に次に述べることを考えるゆとりがある。	原発言の内容が適切に記憶できず、通訳文が原発言からずれて忠実性が損なわれるリスクがある。 「話し手」にとっては、通訳のためにスピーチが中断され、山場を作るのが難しい。

評価結果だけ見ると視聴者は専門家と比べて表面的な評価をしているような印象もあったが、調査後に入手したコメントには通訳について深い関心と興味を抱いていることが表れている。

## 6. 考察

今回の調査から、同時通訳と逐次通訳に対する評価は視聴者と専門家の間でかなり異なるという印象を受けた。視聴者は同時通訳や逐次通訳を自ら行った経験がほとんどないため、技術的な難しさを考慮することなく「聞いて分かりやすいかどうか」を中心に評価した。逐次通訳の際は、起点言語が分かるときは通訳音声聞いてある程度「忠実性」を判断できるが、同時通訳の際に起点言語と目標言語の両方を聞いて判断できるとは思えない。つまり、視聴者には、違和感のない通訳文を聞きやすい声とスピードで伝えてくれる通訳者がありがたいということである。今回の視聴者の調査では、文頭から切って訳していく、いわゆる「同時通訳調」の日本語構文が不自然に感じられたこと、また、同時通訳のスピードが速く、内容を十分消化できなかったことが評価に表れたと思われる。

逐次通訳では、メモを基に訳出文を組み立てることができるので、無理のない日本語の文を作ることができる。また、原発言と同じスピードで通訳するという時間的制約がないため「聞き手」にとって分かりやすい通訳をすることができる。その一方で、逐次通訳では一回のセクションが長くなると記憶への負担が重くなり、メモを見ながら思い出すのに時間がかかるという難しさがある。この調査で使用した逐次通訳は同時通訳に比べて1.5倍以上時間がかかっており、視聴者からも専門家からも「スピードが遅すぎる」という指摘が出ていた。専門家の一人(V)は「テンポがゆっくりというよりは、一生懸命訳語を思い出そうとして時間稼ぎをしているように思える」と述べていたが、記憶の負担が重くなり、メモから内容を想起するのに時間がかかるという意味であろう。ことばの繰り返しや原発言にない事柄を付け加えるのは、つまることなく通訳を続けるための方略と考えられるが、松下(2015)はこれをリスク管理のための“lengthening”という視点で捉え、特に最大限の慎重さが求められる逐次通訳の場面では、リスク管理のために通訳者自身が意図的に複数の「言い換え」や「説明」を行うために訳出文が原発言よりも長くなると論じている。同時通訳はスピードと通訳文の組み立て、逐次通訳は一回のセクションの長さとしリテンションが課題になると言えよう。

## 7. 結論

通訳を複数の行為者が関与するコミュニケーションとして研究するためには、通訳の実践者や研究者など通訳の専門家の視点だけでなく、通訳を使う側の視点が欠かせない。話し手の発したメッセージを通訳者がどのように伝えたかだけでなく、それが聞き手にどのように伝わったかを視野に入れなければ、通訳の実践や教育に役立つ研

究はできないだろう。通訳に対する評価が専門家と一般の通訳の「聞き手」の間で異なる可能性があることを示した本研究はその必要性を示唆したと言える。今後はさらに通訳を雇う側を加える必要もあるだろう。今回の通訳事例で言えば日本政府、米国政府、NHKに当たる行為者である。どのような通訳が利用者の利益に貢献できるのか。社会は何のために、どのように通訳を利用すればよいのか。このような議論を深めるには「話し手」「聞き手」「通訳者」、そして「通訳者を雇う側」の4つの視点が必要だと考える。

「聞き手」の評価は本質的に主観的なものであるため、量的分析による客観的検証を行うのは難しい。本研究は一つの通訳事例のみを取り上げ、調査協力者の人数も限られているため、結果を一般化することはできない。しかし、「聞き手」の視点に立った通訳の評価の研究を進めるためには、このような調査を続け丹念に観察データを積み重ねていくしかない。本研究はそのための一つのステップであると考ええる。

#### 【謝辞】

本稿は日本通訳翻訳学会第18回年次大会で発表した折に頂いた質問や助言に沿って加筆した。心より謝意を表したい。

.....

#### 【著者紹介】

新崎隆子 (SHINZAKI Ryuko) 東京外国語大学大学院および青山学院大学非常勤講師。会議・放送通訳者。連絡先は [rynatsuki@za.cyberhome.ne.jp](mailto:rynatsuki@za.cyberhome.ne.jp)

.....

#### 【註】

- 1 記述されていないが同時通訳と思われる。
- 2 専門家は視聴者に比べて通訳の評価に慣れているため筆者が立ち会う必要はないと考えた。また独立した評価を調べるのであるから一堂に会することは必須の条件ではない。
- 3 <http://blog.goo.ne.jp/burnvd1205/e/12d20015985e7344149f603cb2175109>  
[https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q11159750266](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11159750266)  
(2017年8月28日)

#### 【引用文献】

- Amini, M., Ibrahim- González, I., Ayob, L. (2013). Quality of Interpreting from Users' Perspectives. *International Journal of English and Education*. Volume:2, Issue:1, January 2013. pp.89-98. [Online] [https://www.academia.edu/21207271/QUALITY\\_OF\\_INTERPRETING\\_FROMUSERS\\_PERSPECTIVES](https://www.academia.edu/21207271/QUALITY_OF_INTERPRETING_FROMUSERS_PERSPECTIVES) (2017年9月3日)
- Amini, M., Ibrahim- González, I., Ayob, L., Amini, D (2015). Users' Quality expectations in Conference Interpreting. *International Journal of Multicultural and Multireligious Understanding*. Vol. 2. No. 5. pp.1-17. [Online] [https://www.researchgate.net/publication/307799007\\_Users'\\_Quality\\_Expectations\\_in\\_](https://www.researchgate.net/publication/307799007_Users'_Quality_Expectations_in_)

- Conference Interpreting (2017年9月3日)
- Andres, D. & Fünfer, S. (2011). TV interpreting in Germany: the television broadcasting company ARTE in comparison to public broadcasting companies. *The Interpreters' Newsletter*. No. 16. pp. 99-114. [Online] <https://www.openstarts.units.it/dspace/handle/10077/8257> (2017年8月29日)
- Gile, D. (2001). Consecutive vs. Simultaneous: Which is more accurate? 『通訳研究』 第1号 pp. 8-20.
- Gile, D. (2011). Errors, omissions and infelicities in broadcast interpreting. *Methods and Strategies of Process Research*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.201-218.
- Kurz, I. (1993). Conference Interpretation: Expectations of Different User Groups. *The Interpreters' Newsletter*. No.5., pp.13-21. [Online] <https://www.openstarts.units.it/dspace/handle/10077/4908> (2017年8月27日)
- Kurz, I. (2001). Conference Interpreting: Quality in the Ears of the User. *Meta*, XLVI, 2. pp.394-409. [Online] <file:///C:/Users/ryuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/70DAAOWW/003364ar.pdf>. (2017年9月3日)
- Ng, B.C. (1992). End Users' Subjective Reaction to the Performance of Student Interpreters. *The Interpreters' Newsletter*: Special Issue 1, pp. 35-41. [Online] <https://www.openstarts.units.it/dspace/handle/10077/2173> (2017年8月28日)
- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York: Routledge.
- Pöchhacker, F. (2011). Researching TV Interpreting: Selected Studies of US Presidential Material. *The Interpreters' Newsletter* No. 16. pp.21-36. [Online] [file:///C:/Users/ryuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/EJPAAQLN/NL\\_16\\_4.pdf](file:///C:/Users/ryuko/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/EJPAAQLN/NL_16_4.pdf) (2017年8月31日)
- Wadensjö, C. (1998). *Interpreting As Interaction*. New York: Pearson Education.
- 稲生衣代 (2003) 「放送通訳の変遷と通訳・翻訳手法に関する考察～CNN 二カ国語放送を例に～」 『通訳研究』 第3号 pp.54-69.
- 木佐敬久 (1993) 「同時通訳の日本語 視聴者はどう受けとめているか」 『放送研究と調査』 1993年3月 pp. 28-39.
- 松下佳世 (2015) 「政治上の発言を通訳する際のリスク管理—記者会見の日英逐次通訳の考察を通じて」 『通訳翻訳研究』 pp.1-16.
- 水野的 (2012) 「放送通訳の質的評価」 『放送通訳講義』 pp.159-167. [Online] <http://jaits.web.fc2.com/BIL2012.pdf> (2017年9月1日)
- 柴田実・上勝也・塩田雄大 (1999) 『ニュースの英語放送通訳に関する調査報告書—在日外国人にどう受けとめられているか—』 (文部省科学研究費による研究「国際社会における日本語についての総合的研究」)

添付資料：オバマ大統領冒頭発言 (番号は逐次通訳の区切りを示す)

① Prime Minister Abe and his team have done an outstanding job preparing for the G7 Summit. And we discussed, as Shinzo indicated, the need for us to continue to boost global growth and to move ahead with the Trans-Pacific Partnership. ② The alliance between the United States and

Japan is a critical foundation for the security of both of our countries. ③ That alliance has also helped to fortify peace and security throughout the region. ④ As Prime Minister Abe indicated, we did discuss the tragedy that took place in Okinawa, and I extended my sincerest condolences and deepest regrets. ⑤ And the United States will continue to cooperate fully with the investigation to ensure that justice is done under the Japanese legal system. ⑥ We also discussed a range of regional issues, and given the threat from North Korea, we agreed to continue reinforcing deterrents and strengthening our defense capabilities. ⑦ On maritime issues, we are united in upholding freedom of navigation and the peaceful resolution of disputes. ⑧ We also discussed a range of global issues, including the need for additional resources to help migrants and refugees, and to support Iraq. ⑨ And we discussed the role our countries should play in achieving the early entry into force of the Paris Climate Change Agreement. ⑩ Finally, I'm looking forward to the opportunity to visit with some of our American and Japanese military personnel to thank them for their service, ⑪ and our visit to Hiroshima will honor all those who were lost in World War II and reaffirm our shared vision of a world without nuclear weapons, as well as highlight the extraordinary alliance that we have been able to forge over these many decades.

オバマ大統領の質疑応答での発言 (セクション1のみ)

① Before I answer your questions, Christi, let me just touch on the points that were made earlier about the Okinawa case, because this has shaken up I think people in Okinawa as well as people throughout Japan. I want to emphasize that the United States is appalled by any violent crime that may have occurred or been carried out by any U.S. personnel or U.S. contractors. We consider it inexcusable. And we are committed to doing everything that we can to prevent any crimes from taking place of this sort. And that involves reviewing procedures and making sure that everything that can be done to prevent such occurrences from happening again are put into place.

I think it's important to point out that the SOFA – the Status of Forces Agreement – does not in any way prevent the full prosecution and the need for justice under the Japanese legal system.

And we will be fully cooperating with the Japanese legal system in prosecuting this individual and making sure that justice is served. And we want to see a crime like this prosecuted here the same way that we would feel horrified and want to provide a sense of justice to a victim's family back in the United States.

So, I think the Japanese people should know how deeply moved we are by what has happened and our intention to make sure that we're working with the Japanese government to not only prosecute this crime but to prevent crimes like this from happening again.